『西南アジア研究』No. 75, 2011

# 仏教ソグド語断片研究（II）

吉田　豊

## はじめに

筆者は今から25年前に，Notes on Buddhist Sogdian texts というタイトルの論文を発表したことがある［Yoshida 1986］。そこでは当時すでに発表されていたトルファン出土の仏教ソグド語の断片3点について原典を比定し，あらたにテキストを提出し，翻訳を行った。本稿はいわばそのつづきで，3点の仏教ソグド語の断片を扱う。その内の2点は既に発表されている。

最近になって，いくらか新しい資料が主に中国で発見されてはいるが，それでもやはりソグド語研究の主流は，20世紀の初めにヨーロッパに将来された資料の研究であることに変わりはない。わけても仏教ソグド語の写本で，20世紀初頭以降に発見されたものはほんのわずかしかない。筆者が把握しているのは1980-81年に行われたベゼクリクの発掘で発見された十数点の断片だけである[1)]。そしてこれまでの研究により，ロンドン，パリ，サンクトペテルブルクおよび京都に保管されたテキストはほぼ全点が発表されている。このような状況では，仏教ソグド語文献の研究はもっぱら，既に発表されたテキストの再研究と，ベルリンに保管された未発表の断片の研究ということになる。とりわけ今後重要となるのは，ベルリンの未発表の断片類である。さいわい写真はインターネット上で公開されているから，誰でも研究することができるようになった。現在は Turfanforschung の Ch. Reck 博士が仏教ソグド語写本の悉皆カタログを作成中であり，それが完成すればさらに研究の便宜が与えられることになる。筆者自身は，写真の公開以前から何度かベルリンに赴き写本を調査していたが，仏教文献を含むソグド語文書全点の写真が公開された後は，それらから仏教文献を選び出し文字転写をした上で初歩的な研究を行ってきた。2007年から2008年にかけて発表した2本の論文はそのときの成果である［吉田 2007；Yoshida 2008］。

これら未研究の断片の研究環境は近年になって大きく変化した。それは『大正大蔵経』の電子テキストが利用できるようになったことで，原典の比定は以前に比べてずっと容易になった。このようにしてわずかな断片とは言えいろいろなテキストの原典が解明されることにより，ソグド人が信仰していた仏教の広がりを以前よりもさらに深く知ることができるよ

---

1）それらは吐魯番地区文物局 2000：283-295 で発表した。

うになってきた。本稿は電子テキストの検索により原典が明らかになった断片についての報告である。これらのうち，片面にブラーフミー文字でサンスクリットとトカラ語を表記した資料などは，トルファンにおける多言語社会や，ソグド語面との前後関係など，文化史的にみても極めて貴重な史料である。

## I　SHT IX 2348 『佛説大輪金剛総持陀羅尼経』

これは 4,8 x 7 cm の断片で，片面にサンスクリットとトカラ語 B の仏典が北道のブラーフミー文字 Alphabet u の書体で書かれている。ドイツのトルファン探検隊がセンギムで発見したものだという［Wille & Bechert 2004 : 181］。片面は楷書体のソグド文字で書かれたソグド語仏典である。おそらくソグド語面が本来の表面で，後にこの仏典が廃棄されその紙背を利用して梵語とトカラ語の仏典を書写したものと考えられる[2)]。筆者は 2008 年 8 月 4 日に Reck 博士から写真を送っていただき内容の比定を依頼された。3 行を残す小断片であるが，楷書体なので文字の読みは容易である。すでに Reck 博士が転写したテキストがありそれも送って下さった。テキストは以下の通りである。参考のために，行間に残された語句の訳を与えておく。

1 [　　]n trẓmn(y)h ẓyδn [　　]
　　時ならぬ雹
2 [　　] 'pw z'ry 't 'pw [　　]
　　無慈悲で無
3 [　　]p'δy 'skwy rty š(y)[　　]
　　足で（立って）いる。そして彼に

『大正大蔵経』の電子テキストで，「非時」，「雹」，「無慈悲」，「足」をキーワードとして検索すると，『大正』no. 1230『佛説大輪金剛総持陀羅尼経』の以下の箇所（vol. 21, p. 165b2-6）がヒットし，キーワードどうしは比較的に近接して現れている[3)]：

---

2）むろん表裏の関係はその逆という可能性もある。ただ，敦煌で見つかったソグド語仏典の巻子本で見る限り，もう一方の面に漢文テキストが書かれている場合，乱雑な草書体で書かれており，例外なくソグド語面が表であると判断できる。ここでも同じことが言えるであろう。実際梵語面を研究している K. Wille もそのように判断している。

3）p'δy 'skwy はこれだけなら「立っている（3 人称単数希求法）」と解釈されるが，ソグド語の訳者が対応する漢文をどのように理解していたのかよく分からない。なお本稿では，『大正大蔵経』のテキストを引用するにあたって大藏經テキストデータベース研究会が制作した電子データを利用した。

一切精魅蠱道。更將魔師興雲致雨。非時下
霜雹損一切苗稼。復將貯器伏。於天下行
病殺害衆生。恒將爲業無慈悲心。復有雜類
鬼神吸人精氣。無量無邊有形無形。有手無
手有足無足。不言而來來而作言者。

またこのような対応を示す仏典はこれ以外には見つからない。残されているのはわずかな語句なので，いくらか不安は残るが，この断片を当該の漢文仏典からソグド語訳されたテキストの断簡と判断することは許されるであろう。大塚伸夫によれば，この仏典の訳者と訳出年代は不明であるという。また一説には金剛智（671-741）の訳ともされるという［鎌田ほか 1998：342］。おおよその訳出年代は推定できる。ソグド語訳された仏典の中には，この種の雑密経典は何種類か知られているので，そのようなジャンルのソグド語訳仏典が存在することはなんら不思議ではない[4)]。実際にブラーフミー文字で陀羅尼を書き，そこにソグド語で説明を加えた仏典がやはりドイツのコレクションのなかにある。これはトヨクで出土した断片群 SHT no. 2057（T 2016（T II Toyoq））で，ブラーフミー文字は Gilgit/Bamiyan タイプ II であり，通常の北道の文字とは異なることは注目される[5)]。あきらかに北道の説一切有部とは異なる仏教信仰の伝統の所産である。

## II　『大乘涅槃経』（北本）のソグド語訳の断片：L58

サンクトペテルブルグのロシア科学アカデミー東洋写本研究所が保管するトルファン出土のソグド語文書は，かつて A. N. Ragoza がテキストとロシア語訳を発表した［Ragoza 1980］。その後そこに含まれた仏教ソグド語の断片のいくつかは原典が解明された［吉田 1995：97-103］。最近になってさらに L58 の原典を比定することができた。まず L58 のテキストを提出する。これも 13,5 x 8,2 cm の小さな断片で，わずかに残された 5 行も両端を欠いている：

1　[　　](rty)ms šyr'nk'r" ZK βyz'k xyδ prw(yδ)['k?　　]

4）　この点については Yoshida 2009a の特に pp. 292-296 を参照せよ。

5）　注 4 で言及したソグド語仏典の解説を筆者が執筆した 1997 年当時には知られていなかったので，この文献については紹介していない。この資料については Wille & Bechert 2004 の pp. 72-78 に記述がある。ソグド語のテキストも Reck が転写している。筆者も Reck 博士のご厚意により文書の写真を見ることができたが，草書体で書かれており容易に内容は理解できなかった。そのうちの 1 点（断片 e）では Reck は 'yncyh γr'nw nyš'y と読むが，実際には 'yncyh γr'yw nyš'y「女の身体を断じるべし」と読むべきであろう。これはこの陀羅尼を読むことによって得られる効果であろうか。

2 [　　xy]δ 'nβ'nt 'PZYkδ zy"m' xyδ '(xwš'yt) [　　]
3 [šyr'nk'r]" 'my'm'nty pwst'k cntr ZK βyz'k xy(δ) [　　]
4 [　　'](P)ZY ZK ['] nβ'nt xyδ 'rt'wspy 'PZY ZK[　　]
5 [　　šyr'nk']r" ZK [βyz](')k xy(δ) [　　]

この部分に対応するのは『大般涅槃経』(『大正』no. 374, vol. 12, p. 588a2-5) である。ここでも『大正大蔵経』のテキストを引用し，ソグド語に対応している部分に下線を施すことにする。

時是名爲增。復次善男子。根即是求得即是
因用即是增。善男子。是經中根即是見道。因
即修道。增者即是無學道也。復次善男子。
根即正因因即方便因。從是二因獲得果

漢文原典を参考にしながらソグド語の残された部分を翻訳してみよう。

「……そしてまた善男子よ，根はすなわち求めること［であり，得ることは］すなわち因である。そしてもし支出するなら，それはすなわち増える（ことである。(?)）善男子よ。この経典の中では根はすなわち［道を見ることである。］そして因はすなわち修行である。そして［…］善男子よ，根はすなわち……」

残された部分で注釈を要するような形式があるとすれば2行目の zy"m' であろう。これは，動詞 zy'm「費やす，支出する」の活用形である[6)]。同じ語尾を伴う類似の用例がいくつも見つかっており，従来は2人称単数の接続法形と見なされてきたが，2人称単数は文脈から期待されない。3人称単数の接続法ないしは指令法（injunctive）と見なすことができよう[7)]。

ところで，『大般涅槃経』のソグド語訳には既に3種類の写本が知られている。どれもトルファン出土である。一つはベルリンにある巻子本の2断片（So 14851 および So 14865）である。これは Müller & Lentz が 1934：550-556 において発表しているが，そこで既に So 14851 が『大正』vol. 12, p. 585b6-c4 に対応することが指摘されていた。ただこの時点では未比定であった小断片 So 14865 のほうは，後に百済康義氏によって p. 467a14-15 に同定された。もう一つは京都大学が所蔵する，素文旧蔵の写本でやはり巻子本の断片である。こちらは筆者が比定したが p. 456b4-9 に対応する［吉田 1994a］。そして最後にベルリンと龍谷大学に分蔵される短行貝葉の写本群がある。これはまだ全体のごく一部しか発表されていな

6）ちなみに Ragoza は ny"m' と読んで končil「終えた」と翻訳し，未完了形であるとしている。原典の「用」に対応しているので，彼女の読みと解釈は改められる。
7）この種の形式については拙稿 Yoshida 2009b : 281-293 を参照されたい。

いが，非常に多くの断片が知られていて，故百済康義と W. Sundermann による共同研究が予定されていた[8)]。今回比定した L58 をこれら 3 つの写本と比較すると，その書体は So 14851, So 14865 に非常によく似ており，同じ写本の離れだと推定される。一つの写本がベルリンとサンクトペテルブルグに分かれて所蔵されている例は少なくない。仏典では，『摩訶般若波羅蜜経（T. T. 223)』の巻子本写本断片 L11 とベルリンの K48(＝So 20248）が接合することが指摘されているし，『僧伽吒経』の長行貝葉写本がやはりベルリンとサンクトペテルブルグに分蔵されている[9)]。したがってこの推定にはなんら問題がない。

## Ⅲ　『六十華厳』のソグド語訳：Pelliot sogdien 20

ソグド語仏典に『華厳経』の翻訳があることは以前に筆者が指摘していた。サンクトペテルブルグに保管されている L51 がそれである［Yoshida 1986 : 517-518］。ただこの写本は非常にユニークで，「入法界品」のストーリーの展開だけを記したいわば極度のダイジェスト版で，類似の性格を持つソグド語仏典は他に知られていない。知られている漢訳と比較すると『大正大蔵経』no. 279，すなわち『八十華厳』と最もよく一致するので，これに基づいた翻案であった可能性が高いと指摘した。この写本はトルファン出土であるが，最近になってパリの国立図書館に保管されている P. Pelliot 将来の敦煌写本のなかに，もう 1 点『華厳経』の翻訳があることが分かった。

Pelliot sogdien 20 は 24 cm x 25,5 cm の巻子本の断片で，Benveniste が 1940a：151-152 においてテキストとフランス語訳を提出している。これと同じ年に Benveniste は写真版も発表していた［Benveniste 1940b］。現在は International Dunhuang Project のサイトでより鮮明な画像をみることもできる。ただ彼は，全体の内容を非常によく把握していたにもかかわらず，これが『華厳経』からの翻訳であることには気がついていなかった。実際テキストは楷書体で書かれており文字の読みに問題はなく，ソグド語訳も流ちょうで非常に分かりやすい。下に行間に逐語訳を添えたテキストを提出する。なお，日本語に翻訳しにくい接続詞などには英訳を添えた。

1　[　　](p...k) 'xwš'yt py'm(t) [rty m'yδ š]yr'nk'ry(sic)
　　増やす　癒す　ちょうど　善男子

2　('YKZY ')rwr {w} yš'k 'sty "rr'np' n'm rtykδ cymyδ 'rwryh pr CWRH 'nδ'w'y
　as　薬・草　ある NN　名前 もし　この　薬から　身体　塗る opt.

---

8）この写本について解説する代わりに，百済の死後に発表された最近の研究 Sundermann 2008 ; do. 2010 を紹介しておく。

9）前者に関しては，Kudara & Sundermann 1988 参照。後者については Yakubovitch & Yoshida 2005 を参照せよ。

3 rty xw CWRH wβyw βwt trn 't 'ns'γtk 'PZY ZK p'zncyk γnt'k 'pw'rtt
身体 both becomes 軟 整理された 心の 悪い 離れる

4 rtms 'wyn pwtystβ mx'stβ'n'k mrtxm'k ZK prγnh 'ywγwncyδ KZNH
また 菩薩 摩訶薩の 人 相 如是 thus

5 'PZYkδ ZKw pwδy p'znmync "rr'np' 'rwrh βyrt rtšy ZK m'n ZY ZK
that-if 菩提 心の NN 薬 得る 彼の 心

6 γr'yw δ'wn zβ'kcyk šyr'krtyh 'βz'yt ms m'yδ šyr'nk'r' 'YKZY
身体 with 舌の 善行 増える また thus 善男子 as

7 xwnx mrtxm'k 'ky ZKw ptβr'w z'wr 'rwrh βyrt rty 'cw "δprm
その 人 who 念 力 薬 得る what so-ever

8 δrm ptγ'wšt rtšw kδ'cw pr'wšcy L' wnty ms ZKn pwtystβ'n'k ZY
法 聞く it never 忘却 not する また 菩薩の

9 mx'stβ'n'k mrtxm'k ZK prγnh 'ywγwncyδ KZNH 'PZY kδ ZKw pwδ'y
摩訶薩の 人 相 如是 thus that if 菩提

10 p'znmync ptβr'w 'rwrh βyrt rty c'wn pwt'yšt s'r ptγwštk δrm
心の 念 薬 得る from 佛 pl. 聞かれた 法

11 r'm'nt δ'rt KZNH 'PZYšw βr'wšcy L' wnty rtms m'yδ šyr'nk'r'k
常に 保持する thus that それを 忘却 not する また thus 善男子

12 'YKZY 'rwrh 'sty ZKZY 'wpδy 'sp'rγm'k n'mt kδ βwt w'γwny mrtxmy
as 薬 ある 関係詞 蓮華 花 名前である if ある そんな 人

13 ZKZYšy xwrty rtxw 'sptw 'yw 'βškstw zwt KZNH 'PZY ZK L' myrty
関係詞-it 食す he 完全に 1 劫 生きる thus that not 死ぬ

14 rtms 'wyn pwtystβ mx'stβ'n'k m[rtxm'k ZK prγnh 'ywγwncyδ]
again 菩薩 摩訶薩の 人 相 如是

15 KZNH 'PZY kδ ZKw pwδ'y p'znmync 'wp(δ)[y 'sprγm'k 'rwrh βyrt rty]
thus that if 菩提 心の 蓮華 花 薬 得る

16 "s'nkty[10] ptšm'r krpt' ryzkr'k (.)[ rty m'yδ]
阿僧祇 数（の）劫 自在

17 šyr'nk'r'k 'YKZY xwnx mrtxm(')[k 'ky ZKw βyrt rty]
善男子 as その 人 関係詞 得る

---

10) Benveniste は正しく認識できていなかったが "s'nkty は梵語の asaṃkhyeya「無数」からの借用語である。このことを最初に指摘したのは Sims-Williams & Hamilton 1990 : 34 であった。外国語の語頭の短母音［a］が，通常は長母音を示す二つのアレフ（"）によって表現されていることに注意されたい。これは下で見る "rr'np' でも同じである。この点については Sims-Williams 1981 : 357 を参照せよ。

18　k'w　šwt　šy　"δ'k L'　wynt ms[ ZKn pwtystβ mx'stβ'n'k mrtxm'k]
　何処　goes　him anybody　not　sees again　菩薩　摩訶薩の　人
19　ZK prγnh ['ywγwncyδ KZNH 'PZY kδ ZKw pwδ'y p'znmync　]
　相　如是　thus　that　if　菩提　心の
20　'r(w)[rh βyrt rty　]
　薬　得る

翻訳

「……を増やし癒す。善男子よ，ちょうど Alamba という名前の薬草があり，この薬を身体に塗ると身体が柔軟で調子よくなり，心の悪が離れていくように，また菩薩摩訶薩の人の様子もちょうどそのようで，もしも菩提心の Alamba 薬を得ると，心の，身体の，そして舌の善行は増えるのである。また善男子よ，ちょうど念力の薬を得た人はどんな法を聞こうとも決してそれを忘れないように，また菩薩や摩訶薩の人の様子もちょうどそのようで，菩提心の念（力）の薬を手に入れると，諸仏から聞いた法を常に保持し忘れないのである。また善男子よ，ちょうど蓮華という名前の薬があり，もしそれを服用する人がいれば，その人はまるまる一劫を生き，死なないように，菩薩摩訶薩の［人の様子もそのようで］，もし菩提心の蓮華［薬を得ると，］阿僧祇（すなわち）無数の劫のあいだ自在と［なる。ちょうど］，善男子よ，［……の目薬（？）を得る］人は，どこに行こうとも誰もその人を見ないように，また［菩薩摩訶薩の人の］様子も［ちょうどそのようで，菩提心の……（目薬？）］薬を［得ると……］」

対応する漢文仏典を下に引用する。この場合いわゆる『六十華厳』（『大正』no. 278）と『八十華厳』（『大正』no. 279）のどちらによりよく対応するかが問題になる。ちなみに前者は東晋の佛陀跋陀羅（AD 418～420）の翻訳であり，後者は唐の實叉難陀（AD 695～699）の訳である。

・六十華厳（T. T. no. 278, vol. 9, p. 777a25-b7）

如是。以其力故。長養一切學無學菩薩善根。善男子。譬如藥草名阿藍婆。若用塗體身得柔澤。意離諸惡。菩薩摩訶薩。亦復如是。得菩提心阿藍婆藥。長身口意諸善行業。善男子。譬如有人得念力藥。有所聞法終不忘失。菩薩摩訶薩。亦復如是。得菩提心念力藥者。聞持一切佛法不忘。善男子。譬如有藥。名曰蓮華。其有服者住壽一劫。菩薩摩訶薩。亦復如是。服菩提心蓮華藥

者。阿僧祇劫而得自在。善男子。譬如有人
執翳身藥。一切衆生所不能見。菩薩摩訶
薩。亦復如是。得菩提心翳身藥者。一切諸

・八十華厳（T. T. no. 279, vol. 10, p. 431a23-b5）

樹。亦復如是。以其力故。増長一切學與無學。
及諸菩薩所有善法。善男子。譬如有藥名阿
藍婆。若用塗身。身之與心咸有堪能。菩薩
摩訶薩。得菩提心阿藍婆藥。亦復如是。令
其身心増長善法。善男子。譬如有人得念力
藥。凡所聞事憶持不忘。菩薩摩訶薩。得菩提
心念力妙藥。悉能聞持一切佛法。皆無忘失。
善男子。譬如有藥名大蓮華。其有服者住壽
一劫。菩薩摩訶薩。服菩提心大蓮華藥。亦復
如是。於無數劫壽命自在。善男子。譬如有人
執翳形藥。人與非人悉不能見。菩薩摩訶薩。
執菩提心翳形妙藥。一切諸魔不能得見。善

両者は非常によく似ているが，ソグド語訳とつぶさに比較してみれば，そしてとりわけ下線部に着目してみると，『六十華厳』からの翻訳であることが分かる。このことは二つの点で興味深い。一つはソグド語訳の訳出年代の問題である。7世紀の終わりに成立していた『八十華厳』を翻訳していないという事実と，上で言及したL51が『八十華厳』をベースにしていることとを考え合わせれば，このソグド語訳が成立した時はまだ『八十華厳』が存在していなかったか，十分に流通していなかったことが示唆される。むろん新訳が成立しても旧訳がよく読まれるということはあり得るので，この推定はあくまでも推定である。二つ目は，ソグド人の血を引く法蔵（643-712）は，『六十華厳』によって華厳宗を大成させたとされ，その意味で中国のソグド人仏教徒との因縁が深い経典であると言えることである[11]。しかしこのソグド語訳と法蔵との関係もまた，単なる憶測でしかないことは強調しておきたい。

上でも述べたように，このソグド語仏典には解釈上の問題や，文法上議論すべき問題はない[12]。唯一注目されるのは漢訳の「阿藍婆」に対応する ″rr'np' である。対応する梵語は

11） 法蔵自身による翻訳の可能性も完全には否定できないであろう。

12） ただ rtykδ cymyδ 'rwryh pr CWRH 'nδ'w'y「もしも身体にこの薬を塗るなら（若用塗體）」に見られる，部分格の用法は注目される。原典は対応する表現を示していないので，「～から」を意味する前置詞 cnn, c'wn などによって部分格を表現するやり方は，ソグド語に固有であったことが分かる。

ratilambha 阿羅底藍婆「得喜楽」であることが知られているという[13]。そうであるなら，ソグド語形はむしろ阿羅底藍婆の短縮形の阿藍婆のほうに基づいて作られた疑似梵語ということになる。筆者が以前にも論じたように，漢文原典からソグド語訳された仏典には，梵語そのものではなく，梵語を写す必ずしも正確ではない漢字音写形をベースにした語形が見られる場合がある。阿弥陀（Amitābha, Amitāyus）を意味する "myt' や薄伽梵（baghavant）に基づく pk'β'm はその典型的な例である[14]。この語形ではまた，r をダブらせて［l］の発音を表記しようとしていることも注目される。このやり方は，［l］を表記するための補助記号として，文字 r の下に（ソグド文字を縦書きと見なせば右横に）r を書くやり方に通ずる。もう一つの方法は同じ位置に短いフックを添えるものだが，二つの補助記号，さらにはウイグル文字で典型的に見られる大きなフックとの関係はよく分かっていない。ソグド文字の補助記号や句読点などは別に専論を要するテーマである。なお文字 r をダブらせて［l］を示す例は，地蔵菩薩の陀羅尼を音写した Pelliot sogdien 18（cf. *Textes sogdien,* 1940, pp. 148-149）にも見られることを指摘しておきたい。

## お　わ　り　に

本稿では 3 点の仏教ソグド語文献の原典を比定し，テキストと翻訳を提出した。ソグド人の仏教信仰を考える上では貴重な情報をつけ加えることができたと思う。『大正大蔵経』の電子テキストを上手に検索すれば，非常に小さな断片でも原典を比定できる場合があるので，今後も地道に比定作業を続けていくべきであろう。そのためには，現在までに同定されている仏典に基づいた漢語とソグド語の対照語彙の作成が急務である。これはまた漢字に精通した中国や日本の研究者の責務でもある。

## 参 考 文 献

Benveniste, E.（1940a）*Textes sogdiens.* Paris.

Benveniste, E.（1940b）*Codices Sogdiani.* Copenhagen.

Kudara, K. & W. Sundermann（1988）*Altorientalische Forschungen* 15/1, 174-181.

Müller, F. W. K. & W. Lentz（1934）*Soghdische Texte* II（SPAW, phil. -hist. Kl.), 504-607.

Ragoza, A. N.（1980）*Sogdijskie fragmenty central'noaziatskogo sobranija Instituta vostokovedenija.* Moscow.

Sims-Williams, N.（1981）*Journal Asiatique* 269, 347-360.

Sims-Williams, N. & J. Hamilton（1990）*Documents turco-sogdien de IX$^e$-X$^e$ siècle de Touen-houang.*

---

13）織田 1917：42c は，法蔵の『華厳探玄記』二十および『慧苑音義下』を引いて，このことを説明している。

14）吉田 1994b の特に pp. 375-374 を参照せよ。

London.

Sundermann, W. (2008) Ānanda enters into the Buddha's service. Edition of a Sogdian fragment from the Mahāyāna Mahāparinirvāṇa-sūtra. *Silk Road Sudies* 16, 379-388.

Sundermann, W. (2010) A Sogdian Mahāyānamahāparinirvāṇasūtra manuscript. In: Irisawa, T. (ed.), *The Way of Buddha 2003*. Kyoto, 75-83.

Wille, K. & H. Bechert (2004) *Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden* 9. Stuttgart.

Yakubovitch, I. & Y. Yoshida (2005) The Sogdian fragments of Saṃghāṭa sūtra in the German Turfan Collection. In: Weber, D. (ed.), *Languages of Iran: Past and present. Iranian studies in memoriam David Neil MacKenzie*. Wiesbaden, 239-268.

Yoshida, Yutaka (1986) Notes on Buddhist Sogdian texts. In: Schmitt, R. & P. O. Skjærvø (eds.), *Studia Grammatica Iranica. Festschrift für H. Humbach*. München, 513-522.

Yoshida, Yutaka (2008) The Brahmājāla-sūtra in Sogdian. In: Zieme, P. (ed.), *Aspects of research into Central Asian Buddhism* (Silk Road Studies XVI). Brepols, 461-474.

Yoshida, Yutaka (2009a) Buddhist literature in Sogdian. In: Emmerick, R. E. & M. Macuch (eds.), *The literature of Pre-Islamic Iran. Companion volume I to A history of Persian literature*. New York, 288-329.

Yoshida, Yutaka (2009b) Minor moods in Sogdian. In: Yoshida, K. & B. Vine (eds.), *East and West. Papers in Indo-European studies*. Bremen, 281-293.

織田得能 (1917)『仏教大事典』東京 (再版 1987).

鎌田茂雄ほか (1998)『大蔵経全解説大事典』東京.

吐魯番地区文物局 (編) (2000)『吐魯番新出摩尼教書信文献及有関問題研究』北京文物出版社.

吉田 豊 (1994a) ソグド語の『涅槃経』の断片 『西南アジア研究』41, 57-62.

吉田 豊 (1994b) ソグド文字で表記された漢字音 『東方学報 京都』66, 380-271 (逆頁).

吉田 豊 (1995) ソグド語の『大般涅槃経後分』の断片 『アジア言語論叢』1 (神戸市外国語大学外国学研究 第31号), 97-103.

吉田 豊 (2007) トルファン学研究所所蔵のソグド語仏典と「菩薩」を意味するソグド語語彙の来源について 百済康義先生のソグド語仏典研究を偲んで『仏教学研究』62・63, 46-87.

(京都大学大学院文学研究科)